

青年期ASDの「自己理解」合宿の実践報告

木谷 秀勝・藤井 寛子^{*1}・舩越 高樹^{*2}・坂本佳代子^{*1}・山口真理子^{*3}
牛見明日香^{*4}・岩永 翔太^{*5}・山村友梨紗^{*5}

Clinical Report of Three Days Camp for “Self-Understanding” of Adolescents
with Autism Spectrum Disorder

KIYA Hidekatsu, FUJII Hiroko^{*1}, FUNAKOSHI Koji^{*2}, SAKAMOTO Kayoko^{*1}, YAMAGUCHI Mariko^{*3},
USHIMI Asuka^{*4}, IWANAGA Shota^{*5}, YAMAMURA Yurisa^{*5}

(Received December 21, 2018)

キーワード：青年期自閉スペクトラム症、自己理解プログラム、「自己理解」合宿、効果の見える化

1. 問題と目的

筆者らが実践してきた青年期の自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; ASD) を対象としてきた「自己理解」合宿も、2012年に山口県アスペの会と研究室の大学院生達の協力の下 (中原他, 2012、中原他, 2013)、試行し始めてから、7年あまりが経過した。その間に、福岡市の志賀島、アスペ・エルデの会の日間賀島などで1泊2日から3泊4日までのさまざまな形式の「自己理解」合宿を実践してきた (木谷, 2013b・2014b・2016、木谷他, 2016)。

こうした実践の理論的背景として、木谷 (2013a) で報告したように、幼児期から青年期までの高機能ASDの成長過程を追跡した調査結果として、主体的に「自分らしさ」を選択できるための「自己理解」が重要であることが明確になった経緯がある (木谷, 2014a、木谷, 2016)。

こうした試行錯誤の過程を経て、平成28年度からの科学研究費補助金による3年間の調査研究「青年期高機能自閉症スペクトラム障害の自己理解をめぐる葛藤への支援プログラムの開発」において、青年期ASDの短期集中型「自己理解」プログラム (以下、「自己理解」合宿) のより高い有効性をもつプログラム内容とスタッフの関わり方について検討を進めてきた。

そこで、今回の報告では、平成28年度から30年度までの3年間で実践した「自己理解」プログラムの実践報告を通して、このプログラムの成果と今後の課題を明確にすることを目的とする。

2. 3年間で実践した「自己理解」合宿について

平成28年度からの3年間で、われわれが実践した「自己理解」合宿は、以下の概要のように4パターンになる。なお、今回の報告では、そのうちの3年間で実践している下関での「自己理解」合宿の概要を詳細に報告する。また、青年期女性ASDの「自己理解」合宿の実践に関しては、詳細を木谷他 (2019) に記載しているため、ここでは省略する。

2-1 日間賀島 (4泊5日) の実践

NPO法人アスペ・エルデの会の主催で、毎夏に愛知県南知多郡の日間賀島で開催している「日間賀島合宿」がある。ここでは、アスペ・エルデの会に参加 (会員以外も一部参加) している児童期から青年期までの発達障害児者 (主にASD) を対象として4泊5日の日程で、参加者個々の障害特性や発達課題に応じたさまざま

*1 なかなみメンタルクリニック *2 京都大学学生総合支援センター障害学生支援ルーム *3 下関市こども発達センター
*4 弁護士法人牛見総合法律事務所 *5 山口大学大学院教育学研究科

まなプログラム（詳細は、アスペ・エルデの会のHPを参照）を、それぞれの領域の専門家が中心になって展開している。その中で、木谷が中心になって「自己理解」プログラムを実践してきた（木谷，2014b、木谷他，2016）。この日間賀島での実践の場合、次の点で「自己理解」合宿の成果が明確になることが利点だと考えている。

2-1-1 「自己理解」の準備段階ができていること

参加する多くの青年期ASD児者が、アスペ・エルデの会の定期的な活動に参加して、日間賀島の合宿にも複数回参加していることもあり、「自己理解」を深めるために必要な、感情理解・気分転換のスキル・集団行動上の援助スキル等の基本的なスキルが、身につけている場合が多い。したがって、こうした準備段階ができていることを前提として、「自己理解」を深めることができる利点は、大きく影響すると考えている。

2-1-2 自分自身の時間感覚で変化を実感できること

実際のプログラム自体は、2日目から4日目の午前中（約3時間）で実施しているが、5日間という長い時間の中で、プログラムを通して体得したスキルを、合宿内でのさまざまな活動の中で実践・修正することが可能である。しかも、参加者個々の時間感覚がそれぞれ異なっているが、5日間の中だと、本人もスタッフも焦ることなく、体得したスキルの成果を実感できる機会も多くなることは確かである。

2-1-3 ONとOFFの切り替えが明確であること

一日の生活の流れは、午前中がそれぞれのプログラム、午後は日間賀島がもつ自然を満喫できるようにプログラムが組まれている。このように、ONとOFFを明確にすることと、その見通しを明確にすることで、参加者の気持ちだけでなく、心身の疲労度の調整を行うことが容易になることは確かである。

2-1-4 質量ともに豊かなスタッフ構成

HPに記載されているように、神経発達障害の専門家が集うだけでなく、若手研究者、さらにアスペ・エルデの会のベテランスタッフから若い学生スタッフが多数参加している。したがって、参加者には1対1で担当を固定できるだけでなく、専門的知識や経験が豊富なスタッフが配置されているので、安全かつ安心してプログラムを進めることが可能である。

2-2 東京学芸大学（3日間の通所）の実践

平成29年度には、東京学芸大学の藤野博先生と研究室の協力を得て、東京学芸大学キャンパス内にある研修施設を活用して、通所型（3日間、会場まで自分で通いながら参加する形式）のプログラムを実践した。

大都市圏では、公共交通機関が充実していることもあり、また、青年期ASDの場合には、集団で宿泊することに抵抗感が強い当事者も多いことから、このプログラムでは通所型を採用した。

同時に、当時東京学芸大学大学院博士課程に在籍していた加藤浩平氏（現東京学芸大学研究員）の協力もあり、加藤氏が東京近辺で実践しているテーブル・トーク・プレイング・ゲーム（以下、TRPG）に参加して、今回の「自己理解」プログラムにも関心を示してくれた青年期ASD者6名が参加してくれた。

実際のプログラムは、日間賀島での進め方と同じで、初日は午後から始まり、夕方から最初のTRPGを行い、午後8時前に解散した。2日目の午前中はゆっくりした時間（朝が苦手な参加者のため）から始めて、午後はTRPG、夕方からはピザパーティーでリフレッシュをした。3日目の午前中に「自己理解」のプレゼンを行い、昼に終了する流れであるが、できるだけ、個々の参加者の時間感覚を大切にしながら、ゆったりとしたペースでプログラムを進めた。

また、木谷が参加者と対面することが初めてだったこともあり、加藤氏と藤野研究室の大学院生の協力を得ながら、こじんまりした雰囲気が進めたが、結果的には、この雰囲気があったからこそ、最後まで安全かつ安心してプログラムを進めることができたことは確かである。

こうした通所型のプログラムは、まだ試行段階であるが、大都市圏の場合には、宿泊型との併用を含めて、検討する余地のあるプログラムであることは確かである。

2-3 下関での「自己理解」プログラムの実践

この下関で実施しているプログラムは、日間賀島の実践を中核的モデルに、これまで試行してきた「自己理解」プログラムを集約する形式を採用するとともに、継続的に参加可能なプログラム開発も目的として、平成28年度から30年度まで実施している。今回は、3年間のプログラムの概要を詳細に報告したい。なお、平成29年度までの成果については、藤井他（2017・2018）で報告している。

2-3-1 下関の「自己理解」プログラムの全体構成

下関の「自己理解」プログラムの全体構成（以下、下関合宿）としては、木谷が統括責任者、藤井が生活全般の責任者、舩越・坂本・山口がプログラムの指導と助言者、3名の大学院生がプログラム補助として、下関合宿全体の運営を進めた。合わせて、北九州市のなかなみメンタルクリニックの臨床心理士や下関市の療育現場で活躍する臨床心理士や児童指導員が協力してくれる。同時に、専門的助言として、児童精神科医であるなかなみメンタルクリニック院長中並朋晶先生の支援を受けている。

このように、地方で開催する場合には、豊富なスタッフを準備することが難しい点はあるが、専門性があり、日頃からの連携を取りやすいスタッフを中心に、プログラムを進めるほうが成果が明確になりやすい利点がある。

2-3-2 下関合宿の会場

この3年間は、関門海峡を見下ろすことができるユースホステルを会場として使用している。この会場を選択した最大の理由は、料金の安さである。この下関合宿に関わる諸費用は、参加するASD当事者の負担としている。そのため、できるだけ安価で効率のいい宿泊環境となる会場を選択した。

同時に、会場の大きさとしても、約30名が宿泊するだけでなく、他の団体との接触も最小限にできる会場の大きさとしても最適であった。合わせて、最寄りのバス停から、下関市の複数の観光地への移動をスムーズに行うことができることもあり、実際に余暇プログラムを充実させることができている。

なお、宿泊部屋は、参加者の感覚過敏などを配慮して、8人部屋から2人部屋までを調整している。

2-3-3 参加者

参加対象としては、高校2年生から青年期のASDを対象としている。原則的には、専門的な医療機関で診断を受けていること、同時に本人自身が診断告知を受けていることを前提としている。参加者の多くが、木谷が幼少時期から継続的に支援してきた青年期ASDとなかなみメンタルクリニックや下関市のかねはら小児科などから紹介される場合が多い。

この3年間を通して、延べ26名（うち、6名女性）の参加者があった。内訳では、3回参加が8名（うち、1名が女性）、2回参加が8名（うち、3名が女性）、1回参加が10名（うち、2名が女性）であり、継続して参加できない理由の多くが、就労状況により、3日間の休みが取れない場合が多い。

平成30年度の参加16名の所属先は、高校生2名（支援学校高等部1名）、大学生9名、大学院生1名、就労支援・就労中4名となっている。また、服薬中が6名であった。

2-3-4 3年間のプログラムの変化

平成28年度の下関合宿では、図1に示したように、従来からのプログラムを踏襲した形式で進めた。ただし、新たな取り組みとして、次の3点を試みた。第1に、それぞれの参加者にメモ帳（A6サイズ）を渡し、講義や映画、その他の連絡事項をメモ帳に整理するように指示した。特に、講義などについては、左のページに聞いた内容をメモして、その右のページに疑問点や質問したポイントをメモする方法を指導した。第2に、パソコンの活用を中心に自己理解シートの整理を進めた。参加者の多くが大学生でもあり、また書字への抵抗が強いこともあり、日常生活で慣れているパソコンの活用を進めることで、頭の中の整理スピードとタイピングのリズムがマッチングするかのようになり、プレゼン資料の作成をスムーズに進めることができた。第3に、20歳以上の参加者のうち、保護者からの承諾が取れた参加者の場合には、2日目のバーベキューの時にアルコール飲料の飲酒を許可した。ただし、事前に飲み方などの注意点を示したが、ルールを守りながら、楽しい時間を過ごすことができていた。

3日目のプレゼンの時間では、希望する保護者にも参加してもらったが、親ですら聞いたことがない当事者ならではの思いを聞くことで、家族自身が成長を再確認することができたことも印象的であった。

	8月26日(金)	8月27日(土)	8月28日(日)
7時		7:00 起床 7:30~8:00 朝食、部屋の片づけ	7:00 起床 7:30~8:00 朝食 8:00~9:00 部屋の片づけ
8時			
9時		9:00~10:00 研修⑤ 自己理解シートの作成 アルバイト探しと面接の練習 ※グループAとBで交替しながら	9:00~10:00 スライド作成、リハーサル 10:00~11:30 研修⑦ 自己紹介スライド発表会
10時			11:30~12:00 総括の話 12:00~12:30 閉会式
11時	11:30 スタッフ集合、打ち合わせ(昼食)	11:00~15:00 昼食と唐戸散策 ※家族へのお土産も ※公共交通機関を利用する	
12時	12:30 受付		12:30~14:00 反省会と昼食 (スタッフのみ)
13時	13:00~13:30 オリエンテーション 13:30~14:30 研修① 仲間作りスキル:自己紹介と仲間への質問スキル		
14時	14:30~14:45 休憩 14:45~15:45 研修② 講義:ASDとしての自分自身を知る ※メモを取る練習	15:30~17:00 研修⑥ 自己紹介スライド作成 ※パソコン持参できる人は用意を	
15時			
16時	16:00~17:00 研修③ 担当スタッフの自己理解シート作成		
17時	17:00~18:00 荷物整理、入浴	17:00~18:00 休憩・着替え	
18時	18:00~19:00 夕食	18:00~20:00 夕食(バーベキュー)	
19時	19:00~21:00 研修④ 映画視聴「音符と昆布」 ※自分で感じたことを表現する		
20時		20:00~21:00 入浴	
21時	21:00~ 自由時間	21:00~ 自由時間	
22時	22:00 就寝準備と就寝(参加者) 打ち合わせ(スタッフ)	22:00 就寝準備と就寝(参加者) 打ち合わせ(スタッフ)	

図 1 平成28年度のプログラムの概要

	8月25日(金)	8月26日(土)	8月27日(日)
7時		7:00 起床 7:30~8:00 朝食、部屋の片づけ	7:00 起床 7:30~8:00 朝食 8:00~9:00 部屋の片づけ
8時			
9時		9:00~10:00 グループ活動準備	9:00~10:00 報告書作成、リハーサル 10:00~10:30 研修⑥ 自己理解スライドプレゼン
10時		10:00~15:30 研修④ グループ活動	10:30~10:45 休憩 10:45~11:30 研修⑦ グループ活動プレゼン
11時	11:30 スタッフ集合、打ち合わせ(昼食)		11:30~12:00 閉会式
12時	12:30 受付		12:00~13:00 反省会と昼食 (スタッフのみ)
13時	13:00~13:30 オリエンテーション 13:30~15:00 研修① 自己紹介「この1年間の成長」報告		
14時			
15時	15:00~15:15 休憩 15:15~16:00 コグトレ	15:30~17:30 研修⑤ グループ活動報告書作成	
16時	16:00~17:00 研修② 初めての参加者:自己理解ワークブックの作成 2回目の参加者:就活に向けての面接練習	※初めての参加者は 自己理解スライド作成	
17時	17:00~18:00 荷物整理、入浴	17:30~18:00 休憩・着替え	
18時	18:00~19:00 夕食	18:00~20:00 夕食(バーベキュー)	
19時	19:00~21:00 研修③ グループ小旅行の計画作り		
20時		20:00~21:00 入浴	
21時	21:00~ 自由時間	21:00~ 自由時間	
22時	22:00 就寝準備と就寝(参加者) 打ち合わせ(スタッフ)	22:00 就寝準備と就寝(参加者) 打ち合わせ(スタッフ)	

図 2 平成29年度のプログラムの概要

平成29年度の下関合宿では、図2に示したように、集団活動を中心においたプログラムとして、「仲間がいたからこそ、自分がわかる」体験を取り入れた。具体的には、1日目に参加者が3つのグループに分かれて、それぞれに下関市の観光パンフレットやネット情報などを参考にしながら、2日目のグループでの小旅行の計画を作成した。そこでは、スタッフはできるだけ関与することなく、可能な限り参加者同士が主体的に計画を立てる様子を見守るように配慮した。

2日目の小旅行では、統括責任者の木谷から次のような指示を出した。「小旅行の報告を最終日にプレゼンしてもらいます。そこでは、『こんな所に行って、楽しかったです』といった報告ではなく、『こんな場面で、誰が言ってくれた一言で、旅行が楽しくなった』と仲間を意識した報告をすること。」そこで、カメラやビデオも参加者が交替で撮影することなども、事前に打ち合わせをさせて、スタッフとともに出発した。

その結果として、2日目の午後のスライド作成や3日目のプレゼンの場面でも、参加者同士が主体的に役割を分担しながら、仲間との交流を中心にした報告を交替しながら進めることができた。

こうしたグループを意識したプログラムの進行と並行させる形で、2回目の参加者が、初めての参加者の社会的なモデルとなるような取組も進めた。具体的には、事前に2回目の参加者には「この1年間の成長」をパワーポイントのスライド（5枚程度）で準備するように指示を出していた。1日目に、そのスライドをプレゼンしてもらうことで、初めての参加者にとっても、この合宿での課題を意識することが可能になった。また、小旅行の際にも、2回目の参加者がリーダーとなり、計画を進める姿を直接見ることで、自分自身がどのように動けばいいかの身近なモデルとなり、安心感を高めることができた。

	8月24日(金)	8月25日(土)	8月26日(日)
7時		7:00 起床 7:30~8:00 朝食、部屋の片づけ	7:00 起床 7:30~8:00 朝食 8:00~9:00 部屋の片づけ
8時			
9時		9:00~10:00 外出準備	9:00~11:30 研修⑥ 自己理解スライドのプレゼン 大人としての「自分らしさ」の ファッションショー
10時		10:00~15:00 研修④ 大人としての「自分らしさ」を 再発見しよう！！	11:30~12:00 閉会式
11時	11:30 スタッフ集合、打ち 合わせ(昼食)	仲間たちと「自分らしい」衣装の 買い物(予算:3千円以内)	12:00~13:00 反省会と昼食 (スタッフのみ)
12時	12:30 受付	昼食、午後から「馬関まつり」も あります！	
13時	13:00~13:30 オリエンテーション	15:00~15:30 休憩	
14時	13:30~15:30 研修① 自己紹介「この1年間の成長」報告 役割決めのための面接会 15:30~16:00 休憩	15:30~17:30 研修⑤ 自己理解スライド作成 大人としての「自分らしさ」の撮影会	
15時			
16時	16:00~17:00 研修② 役割別の班別会議	17:30~18:00 休憩・着替え	
17時	17:00~18:00 荷物整理、入浴	18:00~20:00 夕食(バーベキュー)	
18時	18:00~19:00 夕食		
19時	19:00~21:00 研修③ 初回参加者:自己理解シート作成 経験者:買い物のための準備	20:00~21:00 入浴	
20時			
21時	21:00~ 自由時間	21:00~ 自由時間	
22時	22:00 就寝準備と就寝(参加者) 打ち合わせ(スタッフ)	22:00 就寝準備と就寝(参加者) 打ち合わせ(スタッフ)	

図3 平成30年度のプログラムの概要

平成30年度の下関合宿では、図3で示したように、平成28年度と比較して、大幅にプログラム内容を変更した。その背景として、主に2つの理由からである。第1に、2回目・3回目の参加者が多数いるために、成長に合わせたプログラムの改変が必要であったこと。第2に、成長に伴い、就労の問題が顕在化してきたため、この就労を意識したプログラムを検討する必要があったこと、による。

したがって、平成30年度では、「効果の見える化」を目標として、次の2つのプログラムを中心においた。第1に、「仲間たちと『自分らしい』服を買いに行く」プログラムを取り入れた。1日目に広告やネット情

報を仲間同士で確認しながら、限られた金額（3千円程度）で、2日目に買い物に出かけることにした。多くの参加者が、現実には自分で服を買うことがほとんどないために、最初は戸惑っていたが、実際に購入した仲間やスタッフからほめてもらうことで、今までにない自信をもつことができていた。その結果、3日目のファッションショーでは、参加者が主体的に工夫したポーズでカメラに収まり、そのポーズを参加者全員で共有しながら、楽しい雰囲気を作ることができた。

第2に、合宿期間内で、参加者全員に役割を担ってもらい、それに応じたアルバイト代（参加費からのペイバックとして、図書カードでの支給）を支払うプログラムを取り入れた。その場合、次のようにいくつかのハードルを設けた。①事前に役割の内容をメールで連絡して、事前にどの役割をしたいかを決める、②1日目にベテランスタッフとの面接を行い、その面接で志望動機や意欲をきちんと説明する、③役割が決まったら、木谷との間で雇用契約書を交し、捺印をする（なお、印鑑を忘れた場合には、支給なし）、④実際に役割を果たす過程で、自己評価・他者評価を2回受ける、⑤以上の経過を総合的に判断して、3日目に500円から2000円の間でアルバイト代の支給を受ける（捺印のうえ）。

こうした「効果の見える化」の詳細な報告は、来年度以降に行う予定であるが、実際にこうしたプログラムを進めることで、視覚情報が優位なASDには、その場での効果だけでなく、下関合宿の後で、クリニックなどで面接を行った際にも、自己評価・他者評価などの結果を覚えていることが明らかになった。

3. 考察

3-1 3年間のプログラムを通して

平成28年度からの3年間で実施した下関合宿の成果を、さらに図4のように整理した。

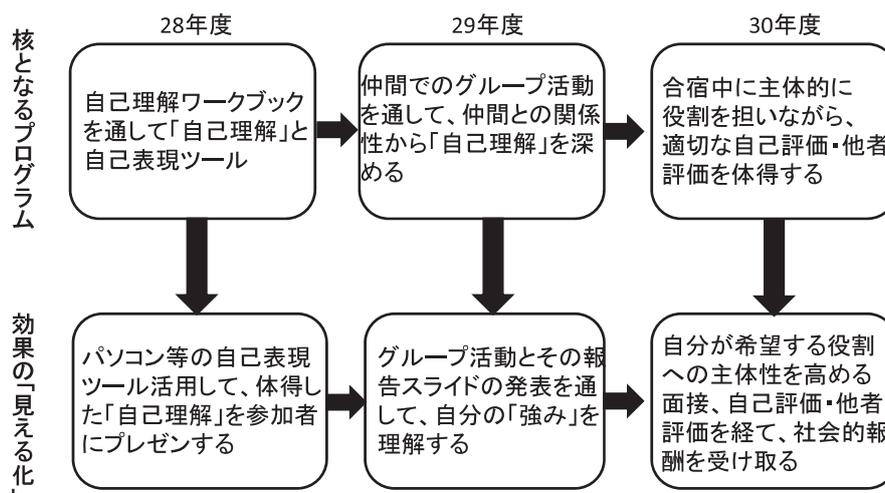


図4 過去3年間の短期集中型「自己理解」プログラムの成果

その結果、「自己理解」を深めるためには、自分の特性を疲れることなく表現できるツール、自分の「強み」、その「強み」を誰にわかってもらいたいのか、そして、社会的報酬を得やすい「自分に適した役割」を、自分自身で主体的に選択しようとする「自己決定」が重要になってくる。同時に、「自己決定」に戸惑いが生じる場合に、他者への援助要請スキルを獲得することによって、「自己決定」が混乱することを予防することも可能になってくる。さらに、主体的に「自己決定」を繰り返しながら経験して、適切な自己評価・他者評価を得ることにより、自己肯定感が高まり、安定した社会参加に至るプロセスが仮定できる。

また、われわれのプログラムを含め、幼少時期から青年期以降のASDを対象とした支援プログラムにおいては、長尾・川瀬（2016）は「狭い特殊な空間で行われるものではなく、生活につながっていく空間や人とのかわりで行われるべきである」と指摘している。実際に、今回の下関合宿も、ある意味では閉鎖的な時空間でのプログラムになりがちだが、スタッフの関わり方以上に、参加者同士がお互いをモデルとしながら、同じ生活を通して「自己理解」から「自己決定」のプロセスを辿る体験を繰り返すことで、筆者らが「自己理解」において重視する「人間関係の還元すること」の成果も期待できる。

3-2 「自己理解」の阻害要因

その一方で、平成29年度において、参加者の抑うつと不安について調査を実施した。具体的には、抑うつについては、BDI-II（ベック抑うつ質問票第2版）を1日目（事前）に実施した。不安については、STAI（状況・特性不安検査）を1日目（事前）と事後（プログラム終了後の1か月以内に郵送で依頼）に実施した。いずれも自己記入方式を採用した。

その結果、BDI-IIでは、平均13.44（7.18）、境界レベル2名（女性1名）、軽度抑うつ2名、中度抑うつ1名（女性）となった。このうち、境界レベルの2名は、STAIで状況・特性ともに非常に高い得点を示した。

STAIの事前調査では、状況不安の平均40.13（12.13）となり、男女ともに普通～高い段階の境界を示し、特性不安の平均49.47（10.26）となり、男女ともに高い段階を示していた。この事前調査と事後調査を比較した結果（事後調査を郵送した13名が対象）、状況不安で事前>事後の有意な傾向が認められた（ $p < .10$ 、自由度12）。

これらの事前・事後調査の結果からも、参加者の多くが、抑うつ気分や不安症状を併存していることが明らかになった。最近の研究でも、朝倉（2012）や Kendall & Wood（2017）により、ASDに不安性障害、特に社交性不安障害の併存率が高いことが示されており、社交性不安障害に伴い、対人関係の問題だけでなく、社会参加にも大きな影響を及ぼしていることが明確になってきている。

こうしたエビデンスや、今回の調査結果で示された高い不安症状からも、短期間での「自己理解」の進展（状況不安の低下）は見られたとしても、日常生活に戻った場合に、その進展を維持することが困難になること、つまり、高い不安症状を有することが「自己理解」の阻害要因となりうるということが十分に予想される。それだけに、今回の下関合宿の参加者のように、定期的に医療・心理・教育・福祉等からのサポートを受けており、こうした専門機関と連携しながらプログラムを実施することが重要である。

3-3 今後の課題

3回にわたる下関合宿を中心にして、青年期ASDの「自己理解」合宿の効果と限界について検討を進めた。今後は、参加者個々の障害特性に応じたプログラムの柔軟な適用とともに、合宿で期待されるニーズに合わせた「効果の見える化」への取り組みを計画的に進めることが求められることは確かである。

その一方で、事前・事後だけでなく、どのようにして「自己理解」の進展を長期的に維持することが可能になるかも検討を進める必要がある。

付記

今回の報告は、科学研究費補助金（科研番号：16K04366、研究代表者：木谷秀勝）による調査研究の成果の一部を報告する。本調査研究の実施にあたっては、個人情報の保護や学会発表や論文文化について、事前に保護者及び参加者自身に文書で承諾を得ている。

また、今回の報告にあたり、医療法人義朋会かなみメンタルクリニック院長中並朋晶先生には多大なご協力を賜っていることに厚くお礼申し上げます。

文献

朝倉聡（2012）：自閉症スペクトラムと社会不安障害．児童精神医学とその近接領域，53(4)，96-101.

アスペ・エルデの会HP：<http://www.as-japan.jp/j/>（平成30年12月1日閲覧）

藤井寛子・坂本佳代子・山口真理子・牛見明日香・木谷秀勝・中並朋晶（2017）：青年期ASDへの短期集中型「自己理解」プログラムの試み．第58回日本児童青年精神医学会総会ポスター発表.

藤井寛子・坂本佳代子・山口真理子・牛見明日香・木谷秀勝・中並朋晶（2018）：青年期ASDへの短期集中型「自己理解」プログラムの試み（第2報）．第59回日本児童青年精神医学会ポスター発表.

川瀬正裕・長尾圭造：シンポジウム2「自閉症の療育指導」報告．児童青年精神医学とその近接領域，57（4），31-55.

Kendall PC & Wood JJ (Eds) (2017): Anxiety in Children and Adolescents with Autism Spectrum

Disorder; Evidence-Based Assessment and Treatment. Academic Press.

- 木谷秀勝 (2013a) : 子どもの発達支援と心理アセスメントー自閉症スペクトラムの「心の世界」を理解する. 金子書房.
- 木谷秀勝 (2013b) : 子どもの発達と知的評価ー日間賀島での「自己理解」プログラムの実践. アスペハート, 34, 88-95. アスペ・エルデの会.
- 木谷秀勝 (2014a) : 自分の障害を理解するー自己理解支援. 臨床心理学, 14(1), 61-64. 金剛出版
- 木谷秀勝 (2014b) : 子どもの発達と知的評価~自己理解をめぐる: 「自己理解」研修合宿の実践から. アスペハート, 36, 90-97. アスペ・エルデの会.
- 木谷秀勝・中島俊思・田中尚樹・坂本佳織・宇野千咲香・長岡里帆 (2016) : 青年期の自閉症スペクトラム障害を対象とした集中型「自己理解」プログラム. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 41, 63-70.
- 木谷秀勝 (2016) : 青年期の高機能ASDへの支援ー「自己理解」を中心に. 児童青年精神医学とその近接領域, 57 (4) , 43-47. 川瀬正裕他: シンポジウム2 「自閉症の療育指導」報告. 同誌, 31-55.
- 木谷秀勝 (2018) : 発達障害のある子の自己理解ー二次障害を防ぐ. 児童心理, No.1056, 58-62.
- 木谷秀勝・岩男美美・土橋悠加・豊丹生啓子・飯田潤子・牛見明日香・山村友梨紗 (2019) : 青年期女性のASDの「自己理解」プログラムの実践. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 47, 29-36.
- 中原竜治・伊藤弓恵・田中亜矢巳・宮本秀一・久木田由紀子・田中幸治・木谷秀勝 (2012) : 青年期の高機能広汎性発達障害者の「自己理解」研究合宿に関する一考察. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 34, 121-127.
- 中原竜治・伊藤弓恵・田中亜矢巳・樋野友希・松田典子・宮本秀一・木谷秀勝 (2013) : 青年期の高機能広汎性発達障害者の「自己理解」研修合宿に関する一考察 (2)ー研修合宿における心理臨床的効果についての検討. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 35, 79-88.